



Title	オランダのムスリムチャプレン調査
Author(s)	葛西, 賢太; 中西, よる
Citation	宗教と社会貢献. 2024, 14(1), p. 27-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95047
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

オランダのムスリムチャプレン調査

葛西賢太*・中西よる**

A Fieldwork on Muslim Chaplaincy in the Netherlands

KASAI Kenta
NAKANISHI Yol

1. オランダにおけるムスリムチャプレン

執筆者の葛西賢太と中西よるは、2023 年 9 月、オランダを訪問し、ムスリムチャプレンたちへの聞き取り調査を行った。本研究は、諸国でのイスラームのチャプレンの比較、さらには諸宗教のチャプレンの比較を今後に志す研究の一環である。ムスリムのチャプレンも受け入れて学びの場を提供しているルーベンカトリック大学など（ベルギー）にも訪問を行ったが、研究全体の目的に鑑みて簡潔な報告に留め、他日の詳細な調査を期したい。

ムスリムチャプレンとはなにものか。まず、ムスリムチャプレンが公に活動した歴史が比較的長い米国において、ムスリムチャプレンの推薦・身元保証をする機関による、一つの定義を紹介しよう。なお、下記の定義の下線部は、ムスリムチャプレンのみならず、ムスリム以外のチャプレンにもあてはまる説明になっている。

ムスリムチャプレンとは、組織の中で公私において宗教指導者として奉仕するための専門的訓練を受けた、ムスリムの男女である。宗教指導者ではあるが、ムスリムチャプレンは、厳密に言えば、「イマーム」とは異なる。ただし、イマームがチャプレンとして奉仕することも、チ

*上智大学大学院実践宗教学研究科死生学専攻・教授

**千葉大学移民難民スタディーズ・特任研究員

チャプレンがイマームとして奉仕することもある。弱っている人々のために精神的なケアや宗教的な導きを提供し、礼拝その他の機会を準備し、効果的なプログラムを用意し、礼拝場所、ヒジャブ、ハラール食、祝日などのムスリムにとって必要なもののための代弁を行う形で、宗教指導者としての務めをするのがムスリムチャプレンである。[Muslim Endorsement Council, no date]⁽¹⁾

上の定義をみると、ムスリムチャプレンはムスリムとしてムスリムの宗教的必要に対して、モスクの外の世俗的な公共空間で奉仕することがわかる。そして、モスクなどで礼拝先導などをする指導的な人を指す「イマーム」とかなり重なるけれども、区別されるべき特徴があることが示唆されている。「チャプレンは〔イスラームについて高度の知識をもつ〕イマームであるけれども、すべてのイマームがチャプレンであるわけではない」という言い回しを、調査でお会いしたどのチャプレンも共通して語っていた。

ムスリムチャプレンは、イスラームコミュニティの外にも——他宗教の人や無宗教の人にも隔てなく奉仕する。「ムスリムや他宗教の人たちとよい関係を築き」「ムスリムや他宗教の人たちの感情的あるいは精神的な危機に対応し」「ムスリムや他宗教の人たちの宗教的な権利を守る」[Muslim Endorsement Council, no date] ことが、ムスリムチャプレンとしての身元を推薦・保証される要件ともなっている。

欧米におけるムスリムチャプレンの一例として、全人口の 5.6% (982,000 人) がムスリムであるという [Centraal Bureau voor de Statistiek 2023] オランダの事例を見ることが、今回の調査の目的であった。

オランダでは、ローマ・カトリックやプロテスタントの複数宗派・宗教を多元主義的に共存させる理念と伝統が現在も尊重されている。19 世紀後半から 20 世紀にかけて、カトリック、プロテスタント、社会主義者、リベラリストという「柱」で、支持政党や学校やメディアや労働組合から福祉施設までの支援が行われ、それぞれの集団を代表するエリート間の協議に基づいて政策決定などが行われる、多極共存型のデモクラシーが維持されてきた歴史がある (Verzuiling: 柱状化)。四つの「柱」は排斥や相互干渉なく共存したとされ、また 20 世紀後半には「柱」は溶解したともされているが、いっぽうで「柱」に入ることのできない少数派が多くの不便を受けるという

現状はある。1960年代に外国人労働力（Gastarbeider）として受け入れられたトルコやモロッコからの移民によって、オランダ国内に増加していったムスリムは従来の「柱」に入ることができず、ムスリムとしての「柱」の可能性を模索する〔義澤 2023: 74-75〕。2001年9月11日の米国同時多発テロ事件や欧米で続いたテロ事件を受けて、とくにイスラーム移民排斥を主張する極右政党への支持が強まり、2002年には移民希望者にオランダ語習得とオランダ社会や歴史についての試験を課すことで厳格化が図られた〔桜井 2017: 299〕。

ヨーロッパの諸国（旧宗主国）で、主として旧植民地から労働者としての移民を迎え入れたことが、「イスラームはヨーロッパ第二の宗教」といわれる状況をつくっている。ヨーロッパ諸国の中でムスリムが多い国は、ブルガリア（人口の11.1%）、フランス（8.8%）⁽²⁾、スウェーデン（8.1%）、ベルギー（7.6%）、そしてオランダ（5.6%）とされる〔Pew Research Center 2017: 4〕。ただし、オランダは旧植民地であったインドネシアやスリナムよりも、モロッコやトルコからの移民が多く、オランダに暮らすムスリムの約3分の2がモロッコ系・トルコ系だという〔Sociaal en Cultureel Planbureau 2018〕⁽³⁾。特に移民第二世代・第三世代のムスリムたちは、両親や祖父母の世代や、伝統文化と結びついたイスラームにおいては想定もされていなかった価値観の多様性や問いに、オランダで直面する。ムスリム移民は世代を重ねてやがてオランダ市民としてのあり方を身につけていくのだが、同時にムスリムとしての価値観も保つことで、相矛盾する複数のアイデンティティを抱えることになる。市民としての責任を果たしていながら、イスラームフォビアやヘイトクライムの対象となることもあるだろう。

諸宗教や無宗教の人々に宗教者としての奉仕を行い、悩みごとを傾聴するのみならず、ムスリムのさまざまな相談事に乗りつつ、権利擁護や代弁のために尽力し、礼拝の先導や宗教食の手配などもする存在としてのムスリムチャプレンのありかたは、その先行形態であるキリスト教のチャプレンから学んだこととは別に、イスラームだからこそ加わった特徴であるといえる。ムスリムチャプレンとはどのような人たちであり、どのような経験をしているのか。米国で展開した現代チャプレン制度から学びつつ、ムスリムチャプレンは国ごとに異なった政治体制や宗教文化制度に対応して、どのような支援がオランダではなされているのか。このような問いをもって、今

回の調査を行った。

なお、インタビューは英語あるいはオランダ語で行われた。中西は事前調査と、訪問先との交渉と、オランダ語通訳、そしてこの論考の逆翻訳による話者への確認を行い、草稿に反映した。英語でのインタビューが可能な場合には葛西も直接聞き取りをした。

訪問先と日程は以下の通りである。ただし、以下の調査報告はこの日程の順ではなく、ムスリムチャプレンの活動する領域や、訪問先がチャプレンの養成教育や制度支援において担う役割ごとに再構成した。そのほうが、オランダのムスリムチャプレンのあり方を俯瞰しやすいと考えるからである。

日時	主要面会相手および訪問先
9月17日(日)	Mustafa Bulut 氏 (オランダチャプレン協会ムスリム部門会長)
9月18日(月)	Ali Eddaoudi 氏 (オランダ防衛省チャプレン)、 Yaser Ellethy 氏 (アムステルダム自由大学ムスリムチャプレン養成コース教授)
9月19日(火)	Harun Bildik 氏 (ニーウェハイン刑務所)、 Mualla Kaya 氏 (ユトレヒト大学附属病院チャプレン)、 Henk Schut 教授 (ユトレヒト大学 心理学者)、 Adam Köse 氏 (精神科クリニック・アムステルダム大学附属病院チャプレン)
9月20日(水)	Ramzi Oulad Lmaroudia 氏 (受刑者の精神医療回復施設チャプレン) Rafiq Ahmed Fris 氏、Hasan Yalçinkaya 氏 (いずれもロッテルダムイスラーム大学教授)
9月21日(木)	Anne Vandenhoeck 氏 (ルーベンカトリック大学教授、ベルギー) Martijn Steegen 氏 (ルーベン工科大学附属病院カトリックチャプレン、ベルギー)

[表1] オランダ調査の日程と訪問先

2. オランダのチャプレン制度と高等教育

防衛省（オランダ軍）と司法省（刑務所）のムスリムチャプレンの選定は、推薦と身元保証を行う CMO（Contactorgaan Moslims en Overheid: ムスリムと政府との連絡を行う代表組織）⁽⁴⁾を通じて行われる。CMO は、チャプレン資質の吟味と推薦に特化した団体ではなく、国内のモスクを傘のように覆い、ムスリムが関連する政府や自治体との交渉（オランダ国内ムスリムを代表する組織として公認されている）や権利擁護など国内のムスリムを支援する事業を一手に担う。つまり CMO は、地域ごとに責任者をもつ、協議会に類する非営利団体（代表組織 [見原 2009: 71-72]）と考えられる。CMO はオランダの公立小学校の宗教教育担当者を推薦したり、経済省などとハラルミートの認証や指導について協働したりしている。ムスリムはモスクにメンバーとして「所属」するのではないために、防衛省や司法省はモスクではなく CMO を通じて人物の推薦を受ける。医療領域などでは後述する SKGV（Stichting Kwalitatierregister Geestelijk Verzorgers: スピリチュアルケア資格登録機関）が機能するようになった⁽⁵⁾が、それ以前に独学でチャプレンとなった人たちが病院によっては奉職しているようだ。

「チャプレンはイマームであるけれども、すべてのイマームがチャプレンであるわけではない」と繰り返し語られるように、ムスリムチャプレンにはイスラームについての高度な知識が求められる。ムスリムチャプレンの多くはトルコ、あるいはモロッコからの移民集団に属し、母国またはオランダでイスラームについて（加えて諸宗教について）の専門的教育を修了している。オランダの高等教育では、WO（Wetenschappelijk Onderwijs）という研究志向の強い、日本でいう大学（Universiteit）と、HBO（Hoger Beroepsopleiding）という実践的な高等職業教育を行う応用科学大学との、二つのシステムが併存している。ムスリムチャプレンになるための専門的な事を学ぶことのできる教育機関は、現在、前者のアムステルダム自由大学の宗教学科と、後者のロッテルダムイスラーム大学内に設置されたコースとの二つのみであるという。両教育機関は、以後に登場するムスリムチャプレンの大半が学びさらには教育に参加している場所である。教育環境の整備が、ムスリムチャプレンという、比較的新しい分野のオランダにおける充実ぶりを反映して

いると思われる。

なお、オランダではチャプレンによる傾聴活動の呼称として *Geestelijke Verzorging* が使われている。ドイツ語の *Seelsorge* に近く、英語でいう *spiritual care* に相当する。養成教育においても米国の臨床牧会教育（*Clinical Pastoral Education*）の影響が多くみられる。以後の聞き取り調査では、チャプレンたちが自身の活動をスピリチュアルケアとも呼んでいることを確認した。

3. 受刑者のために働く

ユトレヒト近郊にあるニーウェハイン刑務所（*Penitenciaire Inrichting Nieuwegein*）の見学の機会を得た。刑務所の施設内は、紙とペンという筆記用具以外、スマートフォンも IC レコーダも PC も、あらゆる荷物をあずける必要がある。刑務所内では撮影も録音もできない。

事前にコンタクトできたもののお会いできなかった司法・矯正領域のキーパーソンがいる。アムステルダム自由大学ほかでチャプレンとなるための教育を受け、キリスト教神学もユトレヒト大学で学び、また刑務所でのムスリムチャプレンの現状と提案についてティルバルフ大学（*Tilburg University*）に博士論文 [Mohamed2014] を提出している Mohamed Ajouaou 氏である。同氏は、イスラームチャプレンシー、イスラームスピリチュアルケアの責任者となった、オランダ司法省で最初の人物である。

ニーウェハイン刑務所にて、ムスリムチャプレンである Harun Bildik 氏にお会いし、所内のムスリムチャプレンとしての活動について説明と案内を受けた。

刑務所のムスリムチャプレンが、多くの業務を抱える状況を、綱渡りする人としてユーモラスな形で表現した漫画を Harun 氏からいただいたので、仮訳をつけて下に示す。



イマームはなんにも (仕事)していないだ ろ！	イフタル	調停	静かな会話	入所者面談	ボランティア
刑務所	金曜礼拝	クルアーン	救急	授業	多施設入院
	ラマダン	講義	管理業務	おやつ	社会復帰
	個人面談	クルアーン練習		礼拝絨毯	午後の礼拝
		断食明け祝		チーム業務	犠牲祭
					話し合い
					昇任研修

[図 1 および表 2] 刑務所チャプレンの多忙さ（表 2 は中西による邦訳）

守秘義務にかかわる記録は残さないこともあり、イマーム（ムスリムチャプレンをさす）はなんにもしていないと思われがちだが、実際にはたくさんの仕事を抱えている。入所者はまずチャプレンの面談を受け、宗教を確認して登録される。以後は受刑者スケジュールが、その宗教の礼拝時間に配慮されることになっている。ムスリムチャプレンは、ムスリムの入所者

のためには、ラマダン（断食月）のための早朝食や夜食の準備、クルアーン（コーラン）の講義や朗唱を用意する。入所してからイスラームに入信する者も、ムスリムだったがほとんど学ぶ機会がなかった者もあり、そうした入所者のために基礎的なイスラーム教室も用意する。入所してくる人が一定期間の隔離を受けた、チャプレンさえも面会が禁止されている人の場合もある。こういった隔離者のリストの中に「ムスリムっぽい」名前を見つけると、Harun氏は担当者に頼んで小さなクルアーンを届けてもらうという。隔離が終わったら話をしようというメッセージを込めて。これには少し驚いたが、後日別の場所を訪問した時に聞いた元受刑者の体験を引いておく。元受刑者は、隔離されている時にクルアーンを受け取ったそうで、隔離中に受け取ったクルアーンこそが、自分を変えたといっていた。

チャプレンには、急病への対応や記録・書類作成などの、刑務所としての管理業務もある。同じ刑務所に所属する複数のチャプレンでこのような職務を協力してこなす。Harun氏は、薬物依存の拡大に対してオランダではハームリダクションという政策がとられており、依存性の低い薬物については安全かつ衛生的に使用できる環境を整えつつ回復を支援するようになっているが、その政策を逆手にとった依存の拡大もあるという。

所内の案内では、待遇改善のために房が順次改修されていること、所内に図書室や医療施設などがあることを見せてもらった。ムスリム以外のチャプレンもいる。訪問時はヒューマニストチャプレン⁽⁶⁾によるディスカッショングループも見学させてもらい、茶菓（一受刑者の誕生日ケーキ）をいただきながら、見学者の私たちも受刑者から日本の受刑者の行動の自由度などについて質問を受けたりした。

以下は、クリスチャンとムスリムの受刑者に配布される受刑者手帳の表紙である。



〔図2〕 受刑者手帳

紙である。左の十字を模した表紙がキリスト教版、右の青を活かした文様の表紙はイスラーム版だ。なお、“1444-1445”とあるのはイスラーム暦の年をさす。

両者とも、手帳本体の見開き右頁は週間スケジュールで、重要な祭日（クリスマスやラマダン開始など）の週の左頁にはそれら祭日の解説がある。手帳の前後には教義や用語、聖書

の重要箇所一覧、イスラームの沐浴と礼拝方法などのオランダ語での説明がある。しかしふたつの手帳の制作の背景には、二つの宗教の現状を思わせる違いが感じられる。

キリスト教版は Arkmission という、受刑者向けの支援団体が制作していて、2024 年で 37 回目になるという。Arkmission は寄附を受けてこの『受刑者手帳 Bajesagenda』を制作するだけでなく、ポッドキャスト番組や受刑者へのクリスマスカード送付なども行っている。手帳は弁護士や面会者やチャプレンと会う予定だけでなく、自分自身の心境の変化の記録や、詩や絵などを表現するために用いて、日々の生活リズムと希望を与えるよう意図されている。そしてこの手帳の左頁の半分は、受刑者による詩や絵が掲載されている。⁽⁷⁾

いっぽう、イスラーム版には前述の Mohamed Ajouaou 氏による序文がついている。オランダ司法省のイスラームスピリチュアルケア部の部長として、2023 年の手帳のねらいが「アッラーを知る」であること、苦しくない時に祈っておくと苦しい時にアッラーの助けがあることなどを述べている。民間団体制作のキリスト教版の手帳をモデルとして、イスラーム版は司法省の支援も得て、あとから制作が始められたのではないかと推測される。またチャプレン個人との面談や金曜礼拝が勧められ、またディスカッショングループで自身の気持ちやオランダでムスリムであることへの対応などを話し合うよう提案されている。キリスト教版に比べて、クルアーンの引用、預言者ムハンマドの言行録の引用、毎日の礼拝時間や礼拝の言葉などにページが割かれており、自己表現よりもムスリムとしての生活のひととおりを学ぶことに力点が置かれている（息抜きのためか、ところどころに笑話の頁もある）。ふたつの手帳の違いから、両宗教のオランダでの現状や、制作者の歴史や背景の違いや、受刑者のどんな需要が想定されているかがわかる。

4. 患者や医療者を支える

医療領域では、病院等の医療施設で活動するお二人のムスリムチャプレン（Adem Köse 氏と Mualla Kaya 氏）にお会いした。また、精神疾患の治療

回復を進める施設でチャプレンとして奉職する Ramzi Oulad Lmaroudia 氏に面会し、施設を見学させていただいた。そしてベルギー最大の大学病院である UZ Leuven の Martijn Steegen 氏をはじめとする五人のチャプレンにもお会いしてお話を聞き、病院の祈りの場を見学することができた。

4-1. 精神科医療領域で奉職する Adem 氏

とくに Adem 氏は、医療領域での第一世代として 23 年のチャプレン経験を持ち、かつ第一世代チャプレンたちの中で唯一の現役チャプレンとして、夕方に時間をとってお話をしてくださったので、詳述したい。ムスリムチャプレンに限らず、チャプレンの歴史は担当領域によって異なる。Adem 氏には、オランダにおける医療領域のムスリムチャプレンの経緯と、現状の課題とを聞かせていただいた。同氏は、精神医療を展開する Arkin グループ (<https://arkin.nl/>) の病院で、外来にも訪問医療にも対応するチャプレンとして奉職する。

Zingeving (人生の意味を見つける・意味を探究すること) が全ての宗教に普遍的にあることを踏まえて、オランダではポジティブヘルスという考えを育てているという (<https://www.iph.nl/en/>)。人生の意味は、患者にとって疾患から回復していくプロセスにおいて肝要だ。かつては医師が Zingeving について患者と話すことはなかったし、その話題はタブーに近かったが、チャプレンがその必要を示して変えていったと、Adem 氏は考える。

Adem 氏はトルコからの移民である。トルコでイスラームについて学び、オランダ移住後に神学を勉強し、アムステルダム自由大学で宗教学を学び、同大学院でチャプレンシーを学んだ。トルコでイスラームについて学んだあと、オランダでイスラーム以外のさまざまな宗教について学んだ経験は、ムスリムにもムスリム以外にも奉仕するためのベースになっている。同時に、ムスリムチャプレンの専門のコースが必要だと、当時、強く感じたという。

「ムスリムチャプレン」という概念がまだ広がっていなかったときに、AMC (アムステルダム大学附属病院) が「ムスリムの患者もスピリチュアルケアを必要としているか？」というリサーチクエスションに基づく調査を行うことになった。Adem 氏は調査者とムスリムチャプレンを兼ねる形で雇用されたが、この問いの前提には疑問を感じ、調査報告の際にもそれに言

及した。「必要か？」と問うまでもなく、「もちろん必要」なのだから、リサーチクエストを「どうしたらムスリムの患者にもきちんとしたスピリチュアルケアを提供できるか」に変えるよう求めた。2000 年から AMC にて、医療分野でのムスリムチャプレンという仕事を、大学院に通いながら切り開いていった。またその一年後に、精神医療分野の医療法人 Arkin でも働き始め、現在に至るといふ。

当時に比べるとムスリムチャプレンのおかれた状況は改善されたが、まだ十分ではない。Adem 氏は、ムスリムチャプレンの配備と、ムスリムチャプレンのための教育という、二つの課題を挙げる。

第一に、ムスリムチャプレンは今必要とされている全ての場所に配備されているわけではなく、CMO などの団体からもっと政府に声をあげてほしいと同氏は考える。第二に、ムスリムチャプレンの教育がまだ整備されていないことも課題と感じている。オランダ国内でムスリムチャプレンが養成できる高等教育機関としては、最初にできたロッテルダムのイスラーム大学か、Schiedam にあるヨーロッパイスラーム大学 (Islamitische Universiteit Europa, 2011-2019)、あるいはアムステルダム自由大学の宗教学科かであったが、現在はロッテルダムとアムステルダムの二か所のみである。ムスリムチャプレンになったのちの継続研修の機会も限られている。チャプレン制度はキリスト教の中でつくられたもので、それをイスラームの枠組みに適応させるためにチャプレン協会のムスリム部門もできた。時代や価値観の変化に応じて、ムスリムチャプレンも変わる必要を感じていると Adem 氏はいふ。

軍と刑務所については、CMO からの推薦と身元保証 (Zending/Endorsement) が必須となっているいっぽう、医療領域については CMO の推薦と身元保証は要件となっていない。病院のチャプレンは患者だけではなく他の医療従事者とも話をし、宗教的観点も踏まえて終末期の治療中止の判断など医療倫理的なことにも携わる。そのような重大な役割があるので、CMO から推薦と身元保証を受けた人が望ましい。オランダの憲法では、患者は、自身の所属する文化・宗教の伝統に基づいたスピリチュアルケアを受ける権利が規定されており、病院からチャプレンの給料も保証されているので、身元が保証された人以外は病院で働くべきではないと Adem 氏は考えているといふ。チャプレンが個々の枠組みで活動するのではなく、共通の基準をつく

ってムスリムチャプレンの質を上げたうえで、そこに個人個人の工夫が加わるのが好ましい、ということだ。

チャプレンがどんな養成教育を受けるのかももうかがった。オランダでは、宗教以外にも、心理学やコミュニケーションスキル、傾聴スキル、他者のサポートのありかたとあわせて、病院で働くのであれば、生理学など人体や病気などのことも学ぶ必要がある。宗教学は、患者がどのような世界観を持っていて、どのような人生の疑問を持っているかを理解するために、またそれらに対応するために必要と思う。患者をとまどわせないようにすることが大切、と強調される。いっぽう、実習の必要性も説かれ、実習でなにが目指されるかにも言及された。チャプレンにとって聴くことが一番大事で、なぜこの患者さんは自分にこの話をしてくれるのかをスーパービジョンでは問うという。実習生は、週に1、2日の実習を4カ月～6カ月継続する。実習生が学んできた理論と現場で起こることはかならずしも一致しないが、理論も大切なので、学んだことを現場に適用できるように指導するという。

ムスリムであるチャプレンとしてのあり方について、聖職者というポジションがないけれども礼拝先導や説教などをするイマームとチャプレンとを比較しながら、Adem氏は以下のように述べる。同氏は「あなたはイマームですか」と患者によく聞かれるが、「イマームはもっと立派な人。自分はチャプレンです。〔チャプレンは〕あなたの現状を踏まえて、あなたの疑問を理解し、なにが必要かを一緒に考えることができるけれども、宗教的に良いか悪いかを判断する者ではありません。人生とはなにか。生きるとはどういうことか。患者さんに起きたことがどういう意味をなすのかを一緒に考えます」といったような返答をするという。医師の仕事と比較して、「病気を見つけるのではなく、患者が病気を理解するのを助ける仕事」とも彼は表現される。自分自身が患者との関わりでこのような考え方やスタンスを確立していったので、実習生が来た時にも、「自分〔Adem氏〕からじゃなくて、患者さんから学ぶんだよ、患者さんの話を偏見なく聞くことから学びがはじまるよ」と教えるという。

治療に関わる情報を患者にどう伝えるかは、集団志向（we-culture）のムスリムの患者と、個人志向（I-culture）のオランダ人患者とで異なっているというイメージがあると、Adem氏は語られた。たとえば余命について、個人主義のオランダ人は、全部知りたがることが多いと感じる。いっぽう、ム

スリムは、家族全体で患者を守りたいと考え、患者だけに直接「余命は○○」などというより、家族に共有するような選択をすることが少なくない。その場合の伝え方として、たとえば、「生と死はアッラーの手の中にある。この状況から抜け出せるように、希望を捨てず、やれることは全部やる」といった、ムスリムの患者にとって親しみのある、分かりやすい言い方で伝えるようにしている、と Adem 氏はいふ。余命がどれぐらいかなど、簡単に患者に言うことができない。その文化の中で、どのように情報を伝えるか、医師も理解する必要があると考えているとのことだ。

4-2. 大学病院の女性ムスリムチャプレン Mualla 氏

Mualla Kaya 氏（ユトレヒト大学附属病院チャプレン）はトルコ系移民の第二世代の女性ムスリムチャプレンで、2006 年から奉職している。院内に他の（他宗教の）チャプレンと共有するオフィスを持つ。葛西と中西の訪問時は、ちょうど新生児の死を前にしたご家族との面談を控えているタイミングで、一時間ほど、チャプレンとしての考え方についてお話をうかがい、病院内の諸宗教対応の祈りの場（Prayer Room）をご案内くださったのち、そのご家族の元に赴かれた。

Mualla 氏は、「タマネギの皮がむけていくように」人間がさまざまなものを手放す現実に自分をあわせてゆかねばならない苦しみに焦点を当てるといふ。病院はそもそも居心地の悪い場所で、だから宗教の違いは問わないし、同じムスリムであったとしても感じ方はそれぞれ違うことを尊重する。神への怒りや疑いなどの言いにくい事柄を患者が口にすることも歓迎し、アドバイスを求められたら、「あなたにとってどういうことか」と時間をかけて何度も一緒に探っていく。病院スタッフの話を聴いたり、異文化間コミュニケーションの研修を企画したりすることもある。

Mualla 氏が経験した訓練や学びとして、臨床牧会教育などのチャプレンのための自己省察の学びは重要だが、年齢を重ねて子育てし父の他界経験などを掘り下げた個人的体験の統合が大きな意味を持っていると話された。

4-3. UZ Leuven のチャプレンたち

ルーベンカトリック大学の Anne Vandenhoeck 教授は、ご自身がかつて奉職していた UZ Leuven の Martijn Steeger チャプレンたちを紹介され、見学の

機会を用意してくださった。同病院はルーベン工科大学に付属しているベルギー最大の大学病院である。なお、ルーベンにはベルギーに属するが、オランダ語の一方言とされるフラマン語が話されている。オランダからの铁路移動ではまったく不便は覚えなかったが、鉄道駅ではフランス語の案内が中心になり、国境を越えたことが感じられた。

Vandenhoeck 教授はチャプレン養成を担当しており、東北大学からの留学生も来ていた。最終日、わずか半日の限られた時間ではあったが、見学前に同教授と昼食をとりながら、米国由来の臨床牧会教育のあり方に見直しが行われていること、特に緊密なグループワークでの強い介入の教育的効果が疑われ、より侵襲性の低いグループワークや面接が探究されている動向をお聞きした。スーパービジョンと臨床記録 (journaling) のやり方の工夫を特に強調された。「その国その文化ごとにチャプレンはぜんぜん違うのよ」と言われ、それを比較検討する意義とともに、葛西は日本版チャプレンの養成にかかわる者として、実践に展開してゆく責任も感じた。

昼食後に UZ Leuven を訪問してチャプレンたちと意見交換した。9 名いるカトリックチャプレンのうち 3 名が男性で、リーダーの Martijn Steegen 氏もその一人である。米国で Christina Puchaleski らが先導したスピリチュアルケアのコンセンサスプロジェクト会議の成果の論文でのスピリチュアリティ定義 [Puchaleski2014: 5] に基づいて、チャプレンも感情面でのよりそいとともにスピリチュアルケアの理論も意識して活動しているという。まず身体医療面でのニーズとスピリチュアルなニーズを確認した上で、第 2 段階として傾聴と (信仰者の場合はそれにあわせた) 儀式を提供するという。ベルギーでは 60% が自称クリスチャンだが、教会に定期的に通うものはもっと少ないという数字を挙げ、しかし、“longing without belonging” (教会に所属しないが精神性は希求する) という姿勢が多くみられると説明された。このような多様性を意識しながらチャプレンとしての活動を行いつつ、supervision (スーパービジョン) だけでなく intervision (チャプレン相互の学び合い) を重視しているという。

ルーベンのムスリム人口は年々増えており、現在は市民の約 10% にも上る [Npdata2020]。これはもちろん、病院内でも見られる傾向である。UZ Leuven で見せていただいた祈りの場も、チャペルが面積の大部分を占めつつも、綺麗な絨毯がしかれたムスリムのための礼拝スペースが設けられて

いた。ニーズが高まる中、病院専属というかたちのムスリムチャプレンはまだいないようだ。UZ Leuven のチャプレンたちの所属部署も Pastorale dienst（司牧サービス）となっており、病院のウェブサイトでは「キリスト教の精神に基づいているが、すべての人のためである」と説明されている。ムスリムの患者の場合、地域のモスクのイマームなどと連携を取りながらケアすることもあるそうだ。しかし、「専門家（ムスリムチャプレン）不在ではムスリム患者に寄り添ったスピリチュアケアを提供するのが難しい場面がある」と問題提起するチャプレンもいた。ルーベנקトリック大学にはベルギーで唯一のムスリムチャプレン講座があり、これからどのように発達していくのか期待が大きい。

4-4. Ramzi Oulad Lmaroudia（精神医療施設チャプレン）

アイントホーフェンにある精神医療施設にて奉職する Ramzi チャプレンを訪問した。日本語にすると「アイントホーフェン市とケンペン市メンタルヘルスケア治療センター グレートブルック園（Landgoed de Grote Beek, Geestelijke Gezondheidszorg Eindhoven en de Kempen）」といった名称になるかと思われる、アイントホーフェン市とケンペン市のメンタルヘルスの管轄施設のようなものである。この施設は、森の中のリゾートのような場所にあり、所内も緑が多くとても広い。この敷地内に複数の精神医療施設があり、Ramzi 氏はその一つである精神疾患患者を抱える法医学的厚生施設（De Woenselse Poort）で、仲間のチャプレンたちと共に内省センター（Centrum voor bezinning）の一員として勤務している。

法医学的厚生施設は 施錠され厳格なセキュリティで管理された塀の中にあり、刑務所同様、ここでも私たちは電子機器をすべてあずけて紙のノートだけを持って中に入った。入所者は、3 レベルの犯罪性の高低と精神疾患の重さで、細かく活動が分けられている。出所に近くなるレベル 1 では、半閉鎖病棟に移り、社会復帰の準備をすることになる。なお入所者の活動としてコーヒー豆の栽培があるそうで、「カフェイン売人（caffeine dealer）」というブラックユーモアの効いたブランド名の記されたコーヒーを所内でおいしくいただいた。

Ramzi 氏はモロッコ系のムスリムチャプレンで、若い時代のアウトローぶり（21 歳まで「不良」だった、という）をイスラームに出会って改めて、イ

スラームの勉強をするために海外に出た。オランダに戻り、人のために尽くすことをしたいと願って大学院で学び直し、2018年にチャプレンシー修士の学位、そして現在の職を得たという。法医学的厚生施設には彼の他に、プロテスタント、カトリック、ヒューマニストのチャプレンが複数いる。チャプレンは定期的に理事などに報告し、また面談を受けて職務を評価される。

同施設では、年間1万1,000人が通常部門と法医学部門の両方で治療を受けている。入所者は、悪と善、過去と未来、病いと癒し、絶望と希望、罪悪感と責任感の狭間にいるので、守秘義務の確保される安全な場所を提供して、後者がよくなるように支援するのがチャプレンの役割であるという。Ramzi氏が強調されたのが、ムスリムの入所者の場合は、オランダ市民でありつつ同時にムスリムであるというアイデンティティの問題がもともと背負われているのに加えて、精神疾患が加わって苦しんでいる例が多い、ということだ。Ramzi氏は、毎日と金曜日の礼拝とを行い、またイスラームについての学びの場も提供しながら、個人面談も行う。室内で着席したフォーマルな面談もするが、頻繁に敷地内を歩きまわり、積極的に入所者に声をかけてまわる。またスタッフのために異文化間コミュニケーションスキルを教えている。

先に入所して回復の過程にある「先輩」の存在は、あとから入所した「後輩」にとって、（自助グループと同様）手本にも、回復の実証にも、励みにもなる。これらの「先輩」は“field expert”と呼ばれ、グループワークの司会もしつつ、自分自身も回復者としての人生を語り続けていく。私たちも二人の“field expert”に引き合わせてもらい、発達障害や複雑な家庭環境を抱えて育った彼らが依存症に苦しみ犯罪に手を染めてしまったのちに、施設で回復しつつ「後輩」を支援していくよろこびを聴かせてもらった。音楽療法や演劇療法などさまざまな活動が提供されているけれども、Ramzi氏が一つの課題としてあげたことがある。処遇を決定する医師が、特に非西洋的背景を持つ入所者の臨床像にある文化的・宗教的側面を十分に認識していないがゆえに、適切な診断やケアを処方できず、入所期間が長期になってしまうことである。

4-5. 防衛の担い手を支える

オランダ防衛省のチャプレン事業局では、オランダムスリムチャプレン

事業局の Ron Green 局長と、ムスリム従軍チャプレン事業部長 Ali Eddaoudi ほかの方々に迎えられ、詳細な説明を受けた。

オランダにおける従軍チャプレンのあり方は、オランダ王国憲法の第 6 条に規定される信教の自由に基づく。政教分離と宗教多元主義が遵守される。オランダ軍のチャプレンはオランダ軍自体が公募するのではなく、またモスクから推薦を受けるわけでもない。政府および軍によって認定された団体（Zendende Instantie）から推薦と身元保証をうけた中から採用される。イスラームの場合は、これを担うのが、全国のモスク等を傘のように覆う代表組織 CMO である。以下の表で、諸宗教のチャプレンの登場と、2023 年 9 月時点でオランダ国軍に当該宗教宗派のチャプレンが何人いるかをみていただきたい。

登場年	宗教宗派	人数
1914	Protestant	46
1914	Roman Catholic	44
1944	Jew	3
1964	Humanist	39
2003	Hindu	3
2009	Islam	5
2020	Buddhist	2

〔表 3〕オランダの従軍チャプレン数

プロテスタントとローマ・カトリックについて多いのは、特定宗教に所属はしないけれども精神性（spirituality）を尊重するヒューマニストの立場である。狭義の無神論者とは異なるということだが、オランダにおいても特定宗教に属さない無宗教者が少なくないことが推察できる。「ヨーロッパ第二の宗教であるイスラーム」のオランダ国軍での兵士数を想像すると、

ムスリムチャプレンの存在意義の大きさは明らかだろう。ロシアのウクライナ侵攻の影響もあって、戦争勃発の危機感が高まり、訓練や演習にあたって、ムスリム兵士へのケアのしかたやイスラーム圏へ派遣される兵士への教育も含めた問い合わせや研修の依頼がヨーロッパ諸国からあると、Geenen 氏は話していた。

ムスリムチャプレン事業部（Muslim Spiritual Welfare Service）は、ハラル食から結婚式まで、(1)儀礼、(2)傾聴、(3)多様な文化的背景をもつメンバーの相互理解を促進すること、以上三つに取り組むという。事業部のリーフレットには、とくに(3)のような宗教多元主義の根拠として、以下のクラーエンの一節を示す。

本当にわれらはあなたがたを男と女とに創造し、また民族と部族にしておいた。これはあなたがたに、互いのことを知り合うようにさせるため。[クルアーン日本語読解制作委員会 2022: 887]

この引用からは、軍で奉職するムスリムたちを諸宗教共存の未来に向けて動機づけたい願いが感じられる。

5. チャプレンをとりまとめる

Mustafa Bulut 氏は、オランダスピリチュアルケア士協会という団体のイスラーム部（Islamitische Sectoren, Vereniging van Geestelijk Verzorgers, <https://vgvz.nl/sectoren/islamitisch/>）⁽⁸⁾で推挙された会長である。今回のオランダムスリムチャプレン調査で面会した方のほとんどは、事前のオンライン打ち合わせで Mustafa 氏から紹介された。医療領域のチャプレンとして先に述べた Adem 氏や Ramzi 氏はイスラーム部の評議員である。なお、同協会にはほかに、プロテスタント、カトリック、正教、ヒューマニスト、ユダヤ教、ヒンドゥー教、仏教、哲学、などの部がある。彼の居住する北ブラバント州クアイク市（Cuijk, North Brabant）のトルコ系モスク（Cuijk Ahmet Yesevi Camii）に隣接するカンティーン（コミュニティスペース）にてインタビューを行った。Mustafa 氏自身はモスクのイマームではなく、オランダイスラーム協会（Islamitische Stichting Nederland, Diyanet）から派遣されたイマームがモスクの隣に居住している。

Mustafa 氏は週三日半、ティルバルフ（Tilburg）市の病院（Elisabeth-TweeSteden Ziekenhuis）でチャプレンを務め、それ以外の時間は自宅で協会の事務などを行っているという。協会のイスラーム部の会長としての彼のプロフィールには、彼がチャプレンとして 12 年半の経験を積み重ねていること、今後は、ムスリムチャプレンの職業の専門性向上や使命の再確認、医療倫理、それらにかかわる出版に注力したいと述べられている。彼が取り組んでいる教育プログラムとして、病院スタッフのための異文化間コンピテンシートレーニング（intercultural competency training）がある。いうまでもなくチャプレンであるということは、イスラーム以外の宗教や価値観を持つ人のためにも隔てなく奉仕するということであり、異文化間を架橋する

取り組みが欠かせないのだが、それに加えて、オランダにいるトルコ系ムスリムとしての視点を話してくれた。

Mustafa 氏は、まずイマームになるために Inholland 応用科学大学 (Hogeschool Inholland) で四年間イスラーム神学を学んだ (クルアーン、ハディース、イスラーム法学、アラビア語) のち、大学院へ進学し、自分自身の信仰を客観的に見なおす学びをされたという。

オランダの病院で緊急入院する患者に、最初に必ず聞くように定められていることは、集中治療室に入りたいか、心肺蘇生を希望するか、酸素治療をするか、などの同意についてであるという。オランダ人には個人志向がみられ、“身体が思うように動かなくなったらもう治療しなくていい”、と思う人が相当数いる。だが、意思決定を一人ではなく家族で行い、家族で患者をサポートする文化のあるトルコ人の場合は、集団志向がつよくて、「医療従事者は自分のためにできることを全部してくれているか」という人間と人間の関係が大事になってくる。トルコ人に上のような緊急時措置の方針についてのストレートな質問をすると、“どうしてそんな質問をするんだ”と怒ったりびっくりしたりしてしまうことがある。だからムスタファ氏は医師全員に、いきなりこの質問をしないようにしましょう、と伝える。この質問をすることで病院への信頼が最初からなくなってしまったりするからだ。チャプレンとしての役割はこういった時の医師と患者の仲介的役割もある。

こうした違いに敏感であるように教育できるのは、オランダで“different culture”について話題になる時が、たいていムスリムにかかわることだからだという。Mustafa 氏らはムスリムチャプレンとして、文化の違いによる医療従事者のイライラを受けて、対応に苦慮してきているからだ。イライラしていることを患者はすぐ見抜き、自分は歓迎されていない (ちゃんとケアしてもらえない) と思う。また、自分のことをイライラさせる患者に対して、医療者もチャプレンも、いいケアを与えることはできない。

近年は、キリスト教徒のほうに信者数は減少しているいっぽう、ムスリムのほうに数も増え信仰熱心という傾向があると Mustafa 氏は感じている。後者では、死を思い来世の自分について考え、病にかかれば“預言者ムハンマドはどう病いに向き合ったのか”と考える患者が多い。同じチャプレン同士でも、キリスト教徒のチャプレンとムスリムチャプレンとで考え方の違いに驚くことがある。あたりまえのことだが同じムスリム同士でも多様であ

る。このようなマクロ・ミクロな文化の違いを超えて、人生の意味を発見することを支援していくチャプレンの仕事には、心理学や社会学だけでなく、イスラームについての疑念や不明点についての回答ができるような、イスラーム諸学についての専門的知識も必要である。「ムスリムチャプレンはみんなイマームになれるけれど、すべてのイマームがチャプレンになれるわけではない」という言い回しを Mustafa 氏も使われた。オランダにおいてはチャプレンに報酬を支払う制度が比較的整っており、ボランティアへの依存が少ないのが、オランダの誇らしい点だと、Mustafa 氏は感じている。

6. チャプレンを養成する

6-1. アムステルダム自由大学大学院のムスリムチャプレンコース

アムステルダム自由大学 (Vrije Universiteit Amsterdam) 宗教神学部 (Faculty of Religion and Theology) の Yaser Ellethy 教授は、オランダで活躍しているムスリムチャプレンの多くを育てた指導者である。同大学では、オランダ国内唯一のマスターレベルでのムスリムチャプレンの養成を行っている。オランダ司法省の Mohamed Ajouaou 氏も教え子であり、ここで教鞭を執っている。2005 年からイスラーム神学センター、また翌 2006 年からムスリムチャプレンのためのマスタープログラムができたという。

オランダ国内にはムスリムチャプレンを養成するふたつの教育機関があり、ひとつはアムステルダム自由大学、もう一つはロッテルダムのイスラーム大学であるが、前者が研究大学 (WO) であるのに対し、後者は実業系の高等教育機関 (HBO) である。また、オランダの教育制度では、WO を卒業、もしくは HBO 卒業後一年間のプレマスターを修了した後に一年間のマスターの課程を履修して修士号を与えるが、アムステルダム自由大学ではポストマスターの課程 (Ambts Opleiding) も提供している。ポストマスターを修了すると、つづいてチャプレンの認定登録機関である SKGV (Stichting Kwalitatierregister Geestelijk Verzorger: スピリチュアルケア資格登録機関) で、そのまま医療領域のチャプレンとして登録ができる。昨年度はムスリムチャプレンコースに 17 名の学生がいた。ほぼ全員がムスリムチャプレンとして就職すること。オランダ国内のチャプレン制度が現在のように整う

前に活動を始めたため資格や教育訓練の不十分なまま経験を積んだムスリムチャプレンもいて、そんなチャプレンのために補完研修・継続研修のための課程も開講し、今年は6名が受講している。マスターコースの学生と一緒にお互いに学び合ってもらおうという。大学院教育では、諸宗教の全ての院生と一緒に学び合うことにより、イスラームに限定せず他宗教についても学ぶことができる多元主義的立場をとる。自分自身を見つめる共通の課題が与えられるわけだが、もちろん各自の宗教の枠組みを使って課題を考えるので、おのずと自他の宗教について再考することになる。アカデミックな宗教についての知識もつけて、たとえば医療現場で他宗教の患者にも対応できるようにする。チャプレンの研究能力が重視されていることもあり、諸宗教、諸文化、心理学、コミュニケーションスキルのほか、医学的な知識など、アカデミックなトレーニングが欠かせない。たとえば、医療領域でモルヒネの使用についての判断（実際は問題ないのだが、宗教的理由を挙げて忌避するムスリムが多いという）や、ムスリム同胞の国に派遣されてムスリム同胞と闘わなければならない兵士たちのところを従軍チャプレンが支えるようなこともある。

このようなチャプレン養成課程は、オランダ政府から認定され助成を受けている。宗教・伝統的コミュニティあるいはさまざまな機関（病院、在宅、刑務所など）で、社会的ニーズや政治的ニーズを満たすことが尊重され保証されており、ムスリムチャプレン養成課程も国費の支えを受けているのである。

6-2. ロッテルダムイスラーム大学のムスリムチャプレンコース

世界的な物流の拠点であるロッテルダムにある、ロッテルダムイスラーム大学（Islamic University of Applied Sciences Rotterdam）に、修士課程で教鞭をとっている Rafiq Ahmed Fris 教授と Hasan Yalçinkaya 教授とを訪ねた。このマスターコースでは、2年間かけて学生をイスラームに基づいたスピリチュアルケアの実践の専門家として訓練する。同大学はオランダの学校制度においては研究大学ではなく高等職業教育を重視する HBO（Hoger Beroeps Onderwijs）として位置づけられる。Applied Sciences というのは、理工系の大学をあらわすのではなく、HBO の趣意を英訳したものである。クルアーン読誦やアラビア語など、イスラーム諸学（Islamic Sciences）を学ぶため、イ

スラーム神学の学士課程とイスラームスピリチュアルケアの修士課程が開設されている。1997年に設立された同大学は、「イスラームの哲学的原則とオランダ社会の社会的価値観と文脈の両方に基づいた」教育をすることを重視してきた。⁽⁹⁾

Rafiq氏はオランダ人の改宗ムスリムで、特にムスリムチャプレンの学術的訓練の必要を感じてイスラームの高等職業教育機関の構想を部分的に発案し、また国内の制度確立とその認知に努力した人。Hasan氏はトルコ系の移民で、既述のAli氏と同期の、最初期のムスリムチャプレン教育を受けた第1世代である。主としてRafiq氏より、ムスリムチャプレンがオランダで求められるようになる歴史を、Hasan氏より同大学でのスピリチュアルケア教育の内容を、お話いただいた。

両氏の話によると、オランダでムスリムチャプレンの必要が感じられた分野は、移民難民問題、刑務所の中のムスリム処遇、医療現場のムスリム対応の三つがとくに大きかったと思われる。1960年代から70年代、スリナム、モロッコやトルコからの多くの移民労働者がオランダにおり、刑務所に多くのムスリムがいたこと、にもかかわらずそれらの人々が認知されず彼らの宗教実践の権利・必要も見過ごされていた。キリスト教のチャプレンは、モロッコ人やトルコ人の入所者の支援に限界を感じていた。そのため、ハーグにあった、改宗ムスリムやオランダ語話者ムスリムの団体 **Muslim Information Center** が1970年代後半に刑務所のボランティア訪問などを始めたことが、ムスリムチャプレン誕生のきっかけとなったという。医療の枠の中でも、1981年にユトレヒトの病院で、外国人のケアのためのワーキンググループがつけられ、また外国人の患者が相談できるようなモスクとイマームのリストが作成された。しかし1980年代、移民たちの祖国出身のイマームたちはオランダ語が話せず、ボランティアのムスリムチャプレンたちはイスラームについて十分な知識をもっていなかったため、イスラームについて十分な知識をもつムスリムチャプレンが切望された。1987年には、オランダ医療協会連盟で、キリスト教以外のスピリチュアルケアの必要が議論される。1994年にはスリナム移民二世のイマームが高齢者の精神病棟に、また1995年にはアムステルダム自由大学の病院にトルコからのイマームが雇用された。このイマームは、翌年ユトレヒト大学附属病院の、ムスリムへのスピリチュアルケアの研究に参加することになった。この研究によ

って、ムスリム患者にスピリチュアルケアは必要であり、宗教儀式と傾聴の二つがともに重要で、そしてムスリムチャプレンは患者だけでなく医療スタッフにも有意義であるという認識が得られた。

防衛省におけるムスリムチャプレンのトレーニングプログラム、ムスリムチャプレンたち自身による週末の *intervision* プログラムが、オランダイスラムスピリチュアルケア財団（Neverlands Islamitische Geestelijke Verzorging (NIGEV)）の設立へと結実した。この財団は、ロッテルダムを含むラインモンド地方のイスラーム組織をとりまとめて政府とつなぐ Stichting Islamitisch Platform Rijnmond (SPIOR) には、最終的には承認されなかったが、それは彼ら自身が、地域とその周辺地域の司法施設においてイスラームのスピリチュアルケアを提供するという一種の地域的承認を政府からすでに得ていたからであるという。

現在同大学で教鞭を執る Hasan 氏は、歴史的経緯の話の後、同大学での養成教育の内容について語られた。ここでも臨床牧会教育の方法論は重視されているが、いっぽう、1970 年代末から始まった「イスラーム心理学」運動⁽¹⁰⁾の影響にも言及していた。たとえば、患者の気持ちに共感しながら非指示的に支援するための手続きとして、現代西欧医学の *whole person care* のイスラーム的具現化を意図して、10 世紀のペルシアの医学者・哲学者イブン・スィナー（アヴィケンナ）の思想にも言及し、ロールプレイでそれを確かめ、教師も学生も相互にフィードバックをしあう。あるいは、臨床牧会教育が自己覚知を重視し、傾聴に臨む前に自分の強みと弱みを自覚することを勧めることの説明として、「自分を知る人は神を知る」ということわざを引くというように。

7. ムスリムチャプレンの位置

調査を終えて、英語圏よりも充実しているかもしれないオランダのチャプレン制度及びその養成教育の充実ぶりに強い印象を受けた。事前の下調べに加え、調査で刺激を受けて、新たに調べなおしたことがとても多かった。その意味で、実際に現場を訪問して会うことの意義は大きかったと考えられる。

宗教が世俗社会において積極的に貢献するためのひとつの回路として、チャプレンは、死生の問題を脇に置きがちな現代社会において意義の大きい仕事である。布教に直接は従事しないものの、現代的課題とイスラーム的応答との統合作業は、非ムスリムにとってのイスラームの意義を伝える機会となると期待されるのだ。

チャプレン育成の制度を運用することの負荷は大きく、チャプレン個人への負担も大きい。専門職としての資格制度や推薦・身元保証の制度はまだ途上にあり、政権の移民政策や医療政策に左右されるおそれもあり、経済的に不安定さも残る。にもかかわらず、チャプレンたちやその養成・制度支援にかかわる人々の志は高く、米英仏その他の諸国の、またムスリムチャプレン以外と比較しながらの研究⁽¹¹⁾と、日本版チャプレンの養成への展開実践とに改めて励まねばと、私たちは動機づけられた。

調査出発点に Cuijk への、オランダ南北を横切る長時間の運転を引き受け、研究上の話題を共有しあいながら、その先の調査への緊張をほぐせるよう励ましてくれたライデン大学院生の Yassir Gnaoui 氏に感謝する。

本研究は JSPS 科研費 JP20K12326⁽¹⁰⁾、JP23K00073 の助成を受けたものである。

註

- (1) あえて米国のムスリムチャプレン推薦・身元保証機関の定義を引用したのは、ムスリムチャプレンが欧米において共通の枠組みと多様な制度展開をする様子を比較する視点を保つためである。
- (2) <https://www.insee.fr/en/statistiques/7342918?sommaire=7344042>, accessed on January 4, 2024.
- (3) Pew Research Center の示すデータとオランダ統計局の示すデータとは不一致である。オランダ国内の数字は後者に依った。
- (4) 全オランダ的なムスリムコミュニティと政府との連携を行う代表機関としての CMO (Contactorgaan Moslms en Overheid) は、2011 年にハラール肉のための屠殺方法を禁止する法律ができそうになったのを、経済・農業・技術革新省の「宗教的屠殺に関する規約」の署名人となることで食い止めた。そこからロビイングもするようになったという。1980 年代のオランダにおいて、憲法・法制上、あらゆる宗教団体が学校や放送局を設立することができるのだという気づきをきっかけに、CMO 的な組織の設立が開始された。1990 年代に、複数のモスクや他の小さなムスリム団体のとりまとめの組織がふたつでき、それをベースに国

全体ムスリムコミュニティ全体でまとめるために大合併を試みたところうまくいかなかった。けれどもこのことを通して、(スピリチュアルケアの必要も含めて) ムスリムコミュニティがオランダにおいて抱える課題が見え、オランダ政府との連携をとるための組織の必要性が、ムスリムコミュニティ側にも政府側にも明らかになったという。こうして設立された CMO は 2004 年に政府から正式に、オランダに在住するムスリムと、政府とのあいだの窓口として認定をされた。特にチャブレン関係(刑務所と軍)と(無宗教の)公立学校(openbare school)でのイスラーム教育の面で活躍している。なお、この公立学校では、学校、若しくは生徒・親がどの宗教教育を取り入れるかを選択するしくみになっており、ムスリムの子弟はこの公立学校に行くことが多い。オランダのムスリムの社会進出と代表機関との関わりについては、義澤 [2023] が詳しく検討しており、CMO の位置づけを理解する助けになった。

- (5) CMO が医療領域のチャブレン推薦に関わるか否かについて、Mustafa 氏の説明は他の人とじゃっかん異なっている。医療領域でも、イスラームのスピリチュアルケアには CMO の推薦が必要であると彼はいう (CMO-zorg zending)。SKGV (Stiching Kwalitatierregister Geestelijke Verzorgers) は、イスラームのスピリチュアルケア者のリストを含む、医療におけるスピリチュアルケアの専門家リストに責任を負っているという。今回、私たちは制度の詳細を確認することができなかったもので、Mustafa 氏の説明を註記することで、両論併記の形をとりたい。
- (6) Humanist/humanism は、日本語でカタカナで表記されるヒューマニスト/ヒューマニズムとはじゃっかん異なる含意を持つ。日本語の場合は無神論 (atheism) はヒューマニズムに含まれないだろうが、英語の humanism の語には無神論も入る。オランダ国内の調査では、各所のインフォーマントにこの点を確認したところ、“人間を尊重する立場で、宗教否定ではない”という応答が毎回返ってきた。
- (7) <https://www.arkmission.nl/bajesagenda>, accessed on December 21, 2023.
- (8) オランダで行われているスピリチュアルケア (Geestelijke Verzorging) の広報サイト (複数団体の共同運営) も参照。 <https://geestelijkeverzorging.nl/>, accessed on September 10, 2023.
- (9) <https://www.iuasr.nl/>, accessed on October 1, 2023.
- (10) 「イスラーム心理学 (Islamic Psychology)」とは、1970 年代にトルコの心理学者 Malik Badri によって提唱されたもので、“キリスト教的な思考枠組みの制約を受けた、西欧人からデータを得た西欧心理学ではなく、西欧心理学の成果を取り入れつつイスラーム諸学における心理学的考察と統合したもの”であるという [Badri2016=1979]。私たちのみところ、この「イスラーム心理学」は、ムスリムからデータを得た一つの学問分野というより、世界的なイスラーム復興の影響を受けた一つの運動、西欧心理学を対抗相手として立てた「諸学知のイスラーム化 (Islamization of Knowledges)」運動の一環というべきものと理解される。
- (11) この調査のきっかけとなったのは、イランイスラーム共和国のイスファハーン医科大学教授でシーア派イスラームのスピリチュアルケアを模索し担い手を養成しようと奮闘していたルーホッラー・ムサヴィザーデ氏に、イランにおける医療・看護と生命倫理を研究する国際医療福祉大学の細谷幸子氏が引き合わせ

てくださったことである。ムサヴィザーデ氏と葛西は笹川平和財団が支援した緩和ケアについての国際会議の折にイスファハーンで会い、細谷氏と葛西とのムスリムチャプレン研究に、日本国内のムスリム含む難民の調査研究をしていた中西が加わることで、今回の調査が形になった。ムサヴィザーデ氏の仕事は、西欧社会におけるムスリムのアイデンティティ模索とは独立して、氏自身の臨床におけるスピリチュアルケアの必要性をイラン国内において自覚した上で取り組まれていて、意義深いものである。

参考文献

- Ajouaou, Mohamed 2014 *Imam Behind Bars: A Case Study of Islamic Spiritual Care in Dutch Prisons Towards the Development of a Professional Profile*, Createspace Independent Pub.
- Badri, Malik 2016 *The Dilemma of Muslim Psychologists*, Islamic Book Trust (First published in 1979 by MWH London Publishers).
- Centraal Bureau voor de Statistiek 2023 “Nederland in cijfers: Welk geloof hangen we aan?” <https://longreads.cbs.nl/nederland-in-cijfers-2023/welk-geloof-hangen-we-aan/>, accessed on January 2, 2023.
- Muslim Endorsement Council, “Muslim Chaplains,” <https://muslimendorsementcouncil.org/endorsement/>, accessed on September 5, 2023.
- Npdata, April. 25, 2020, “Waar woont een groot deel van 'onze mensen'?” <https://www.npdata.be/BuG/448-Moslims/>, accessed on January 24, 2024. <https://www.npdata.be/BuG/448-Moslims/>, accessed on January 24, 2024.
- Pew Research Center, Nov. 29, 2017, “Europe’s Growing Muslim Population: Muslims are projected to increase as a share of Europe’s population – even with no future migration,” <https://www.pewresearch.org/religion/2017/11/29/europes-growing-muslim-population/>, accessed on August 23, 2023.
- Puchalski, C., et al. "Improving the Spiritual Dimension of Whole Person Care: Reaching National and International Consensus," *Journal of Palliative Medicine*, 17(6), 2014, pp.1-15.
- Sociaal en Cultureel Planbureau 2018 “De religieuze beleving van moslims in Nederland” https://www.scp.nl/binaries/scp/documenten/publicaties/2018/06/07/de-religieuze-beleving-van-moslims-in-nederland/Moslims_in_Nederland.pdf, accessed on January 22, 2024.
- 葛西賢太 2024 「米国のムスリムチャプレン」『東京大学宗教学年報』41、東京大学宗教学研究室、近刊。
- クルアーン日本語読解制作委員会 2022 『クルアーン 日本語読解』東京ジャーミイ出版会、49:13。
- 桜井美津夫 2017 『物語オランダの歴史』中公新書。

佐藤弘幸 2012→2019 『図説オランダの歴史』河出書房新社。

見原礼子 2009 『オランダとベルギーのイスラーム教育——公教育における宗教の多元性と対話』、明石書店。

義澤幸恵 2023 『オランダのムスリム移民——「柱状化」と多文化主義の可能性』明石書店。